

小河原義朗（1997）「発音矯正場面における学習者の発音と聞き取りの関係について」
『日本語教育』92号， pp.83-94

1. はじめに

- 問題意識：外国人日本語学習者の発音と聞き取りの関係については、一般的に「聞き取りができれば発音もいいだろう」ということがよく言われるが、その実態については解明されていない。
- 本研究の目的：日本語教育における発音矯正場面を想定し、教師によって繰り返し提示される日本語のモデル発音を学習者はどのように聞き取り、どのように模倣・発音し、同時にその自分自身の発音をどのように聞いて指導を受けているのか、その実態を明らかにする。

2. 研究の方法

■ 4 つの聴取実験

			例
モデル発音の聞き取り	同定	教師の繰り返すモデル発音が同じかどうか判定する能力	日本人が発音した「ざ」と「じゃ」を聞いて、同じかどうか判定できるか
	再認	教師の繰り返すモデル発音が何を発音しているのか認識する能力	日本人が発音した「ざ」を聞いて、それが「ざ」であると正しく判定できるか
自分の自聞き取り	モデル—自己同定	教師の繰り返すモデル発音を模倣した自分自身の発音と教師のモデル発音が同じかどうか判定する能力	日本人が発音した「ざ」と学習者自身が発音した「ざ」を聞いて、同じかどうか判定できるか
	自己再認	自分自身の発音が意図したとおりの音声として実現されているかどうか認識する能力	学習者自身が発音した「ざ」を聞いて、それが「ざ」であると正しく判定できるか

- 被験者：韓国全北大学校日語日文学科の学生 27 名(男 8:女 19)、20 代、韓国無アクセント方言話者

■ 発音矯正の対象

単音

「ざーじゃ」「ぞーじょ」「つーちゅ」

アクセント

「着る（平板型）」 — 「切る（頭高型）」

「日本（中高型）」 — 「二本（頭高型）」

「変える（平板型）」 — 「帰る（頭高型）」

イントネーション

A：もう帰りませんか？

A：これは何ですか？

B：そうですね（ ↑ ）。

B：そうですね（ ↓ ）。

帰りましょう。

ちょっとわかりません。

A：不合格でした。

A：あの人は学生ですよね。

B：そうですか（ ↓ ）。

B：そうですか（ ↑ ）。

残念でしたね。

私は先生だと思います。

プロミネンス

A：いつ試験なんですか？

A：明日映画に行きませんか？

B：明日試験なんです。

B：明日試験なんです。

A：どうして休んだんですか？

A：明日の授業はどうでしたか？

B：かぜで休んだんです。

B：かぜで休んだんです。

- 聴取実験で扱うモデル発音： ～ について東京語話者(男:23 歳)の発音を DAT 録音機に収録し、東京語話者 7 名によって自然であると判定されたもの。

- 実験手順： ～ について、被験者の発音を DAT 録音機に収録→ ～ の各ペアについて(1)「同定」・(2)「再認」実験→後日、被験者の発音を編集し、(3)「モデル—自己同定」・(4)「自己再認」実験→続けてインタビュー調査

- 音声出力・解答：コンピューターを用い、各ペアについて 2 回ずつランダムに出力される音声について、出力ごとに画面上の選択肢で解答させた。

3. 実験の結果

- 学習者の発音の能力（「発音評定値」）の判断：東京語話者 10 名が評価。結果を 5 段階評定値として数値化。

単音

- 「同定」と「発音」の相関（図 1 参照） 無関係

- 「再認」と「発音」の相関（図 2 参照） 無関係

・ 聞き取り能力の 3 群

下位群：「長短」の基準をもっている。

→「長短」という基準は聞き取りには有効ではなく、教師による基準の
修

正が必要。

中位群：基準をもっていない。

上位群：独自の基準をもっている。

→基準が曖昧で、個人的・感覚的なものではあるが、各被験者にとっては
有効な手段であるため、何らかの妥当な基準を意識的にもつことが聞
き取りには肝要。

■「モデル—自己同定」と「発音」の相関（図3参照） 無関係

- ・正聴率がかなり悪い→被験者はモデル発音と自分自身の発音が同じかどうか自分で
は判断しにくい。

教師が適切に評価する必要がある。

■「自己再認」と「発音」の相関（図4参照） 無関係

- ・発音評定値の2群

下位群：「長短」の基準をもって発音。

→「長短」という基準は発音には有効ではなく、教師による修正が必要。

上位群：独自の基準をもっている。

→基準どおりに発音できているということが聴覚的に知覚されていれば
いるほど結果的に発音も良くなっているといえる。

アクセント

■「同定」と「発音」の相関（図5参照）

- ・正聴率平均 96.0%→学習者はアクセントパターンが同じかどうか容易に判定できる。

■「再認」と「発音」の相関（図6参照）

- ・上位群と下位群にはっきり分けられる

→アクセントに対する必要性・意識・定着度といった学習者要因がアクセントの聞
き取りを左右している。

■「モデル—自己同定」と「発音」の相関（図7参照）

- ・正聴率（66.3%）が悪い→被験者はモデル発音と自分自身の発音が同じかどうか自
分では判断しにくい。

教師が適切に評価する必要がある。

■「自己再認」と「発音」の相関（図8参照）

- ・全員が基本的ではあるが、「音の高低」という基準をもっている。

→聞き取りができる学習者ほど、発音もよくなっている。

・ イントネーション・プロミネンス

- 「同定」と「発音」の相関（図 9・10 参照）
 - ・ 正聴率が高い（97.9%・87.1%）→容易に判定できる。
- 「再認」と「発音」の相関（図 11・12 参照）
 - ・ 正聴率が高い（88.6%・80.6%）→容易に判定できる。
- 「モデル—自己同定」と「発音」の相関（図 13・14 参照）
 - ・ 正聴率がかなりが悪い（57.8%・56.0%）→自分では判断しにくい。
- 「自己再認」と「発音」の相関（図 15・16 参照）
 - ・ 全員が基本的ではあるが、それぞれ「抑揚」・「どこを強調するか」という基準をもっている。
 - 聞き取りができる学習者ほど、発音もよくなっている。

4. 結果の考察

- 「聞き取りができれば発音もできる」とは限らない。
 「聞き取りができれば発音もできる」といえる場合→「自分自身の発音の聞き取りができる」場合である。
- 教師の役割
 - ・ 学習者がモデル発音を繰り返す際に、どのような基準や意識をもって聞き、発音しているのか把握する必要。
 - ・ 学習者が自身の発音がモデルと同じかどうか区別できない場合
 →教師は学習者の発音に対して的確な評価を与える必要。
 - ・ 発音矯正が学習者にとって受身的な活動にならないように、学習者が自身の発音の
 あ
 り方を意識的に捉えさせ、学習者の意識の中に正しい発音の「基準」を作らせるよ
 う
 な自己評価意識を高める指導が重要。
- 今後の課題
 - ・ 発音に対する的確な評価を与え、学習者の自己評価意識を促す学習活動
 →学習者同士で発音を評価しあう、学習者の発音を録音して発音指導のための教材として使う
 →実際の授業における有効性については今後の課題

【論評】

「聞き取りができれば発音もいいだろう」と一般的に言われる。これについて、いろいろな実験を通じて、「そうとは限らない」ことを明らかにしたところは評価できる。しかし、
 実験結果を分析するに当たっていくつかの疑問点が残る。この論文では「発音評定値」が

かなり重要な意味をもつと思われるが、「発音評定値」を判断してもらった東京語話者の
説
明とその基準が全然示されていない。